# 夏の流れ

# の流れ

丸山健二

文藝春秋

# 夏の流れ

〈著者略歴〉
昭和18年長野県飯山市に生る。39年国立仙台電波高等学校卒業。同年江商株式会社にオペレーターとして入社。42年同社を退社。現在国際間通信のオペレーター。
41年10月「夏の流れ」で文学界新人賞受賞。
42年1月同作品で芥川賞受賞。
現住所　東京都世田谷区烏山町2,317

昭和42年7月15日　第1刷　定価420円

著作者　丸山健二（まるやま けんじ）
発行者　上林吾郎
発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3
振替口座　東京　78743

万一落丁乱丁の際はお買求めの書店又は発行所にてお取替致します

印刷　凸版印刷
製本　加藤製本

© 1967 Kenji Maruyama Printed in Japan

目次

夏の流れ……3
雪間……93
その日は船で……155

装幀　松田穣

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

# 夏の流れ

# 一

まだ五時なのに夏の強い朝の光は、カーテンのすきまから一気に差しこんできた。私は毛布を顔までひっぱりあげた。夜の涼しさは消え失せ、次第に、真昼の暑さを取り戻してゆくのがわかった。私はこれ以上眠ることをやめ、毛布を両足でからめのけ、蚊帳の裾をはねた。眼をあけると蚊帳の緑がしみる。手をのばしてタバコをひきよせる。朝陽を反射した煙が紫色に昇って行く。起きぬけのタバコは頭をくらくらさせた。

家の周囲を走りまわる息子たちの小きざみな足音が聞えてきた。妻はとっくに起きていて、台所でなにかやっていた。

「起きたの――」

台所で妻が言った。

「ああ」と少したってから私は答えた。

子供たちが、なにもかも蹴散らかして、蚊帳の中にとびこんできた。七歳になったばかりの兄が私の首にかじりついた。私は布団の上に仰向けになり、五歳の方を足の裏に乗せ撥ね上げてやった。

「よしなさい。蚊帳が破れるでしょう」

妻は入ってきてそう言うと、蚊帳をはずし、布団をたたんで、ガラス戸をいっぱいに開けた。私は子供たちと窓に腰かけ外を眺めた。空は濃い青で雲は少なく、高い刑務所の塀と低い山裾の間に見える海は白く穏やかな波をひるがえしていた。整然と並んでいる、小さな平屋建ての官舎も、皆起きてるようだった。気の早いあぶら蟬がじりじり鳴き始めた。

「今日も暑くなるな」と私が言った。

「そうね。夏ですもの」

妻はハタキをかけながら答えた。

実際、今年の夏はひどい暑さで、もう幾日も雨が降っておらず、なにもかも乾ききり、日中の暑さを思うと、今からうんざりした。

子供が新聞を取りに、玄関へ走って行った。妻は掃除をおえ、折りたたみのテーブルをひろげて、朝食の用意をしていた。私は妻の腹をちょっと見た。だいぶ大きくなったと思い、台所に行って歯を磨き、口をゆすいだ。夜のうちに冷えた水道の水は気持ち良かった。子供たちも脇にきて顔を洗った。私はタオルを針金にかけ、柱の細長い鏡で自分の顔を見た。子供がそれを見て笑った。それで、もっとおかしな顔をしてみせた。また、子供たちが笑った。

朝食の時、妻は子供の食べ散らかしを拾ったり、水をついだりで、忙しかった。

「お前、まだ食べられないのか？」と私が言った。

「だって朝は無理よ」

「何か食べておいたほうがいいぞ」

「いつ生まれるの？」

チビが茶碗から顔を上げて言った。それがだしぬけだったので、私も妻も笑った。
「あと三カ月――雪の降る頃よ」
「女の子がいいな」
兄が口を入れる。
「そうだといいのにね？」妻は私にきいた。「あなたはどっち？」
「そんなこと言っても始まらんさ」
「ただきいてみただけよ……あなた男の子だといいと思ってるんでしょう」
「ああ」と私は言った。「男がいいよ。手間がかからなくてな」
「だって三人目でしょう。今度は女の子欲しいわ」
「……」
「ねえ、聞いてるの」
「聞いてるよ」
「また、新しい人でも入るの？」妻は言って、私の読んでいる新聞を、上からのぞきこんだ。
子供たちも両側から写真を見た。



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

「誰も入りゃしないよ」と私は言って、新聞をたたんだ。
「この前入った人どうしてるの？」
また、妻がきく。
「誰？」
「親子二人殺した人よ。ほら体の大きい」
「あいつか。おとなしいもんさ」
「そう。きっと平気なのね。子供まで殺したんでしょう、ひどい人ね」
「まあな」
「人間じゃないわね」
「人間さ。出かけるぞ」
私は面倒になって立ち上がった。起床を告げる刑務所のサイレンがばかでかく鳴った。子供たちは表に出て行った。
私は洋服ダンスを開け、薄茶の制服を着てネクタイを締めた。二日目は汗臭かった。妻はハンガーからズボンをはずし、軽くブラシでこすってよこした。

「帽子かぶりなさいよ」と妻が言う。
「家の中からかぶることないだろう。どうせ一日中かぶっているんだから」
私は玄関に出て靴をはいた。妻は大きな白いハンカチをたたみ、ズボンの後のポケットに入れた。
「気をつけて」と妻。
「ああ。それよりお前は大丈夫か？」
「別になんともないわ」
「気分悪くなったら医者に行けよ」
「それくらいわかってますよ。初めてじゃないもの」
「うん、じゃ行ってくる」
家を出ると、狭い道で遊んでいた子供たちが両腕にぶら下がってきた。
「角までよ——」
後から妻が叫んだ。子供はぶら下がりながら、両足をバタバタ動かすので、舗装されていない道は土埃がたった。

「釣に連れてってよ」
兄の方が私を見上げて言った。
「そのうちな」
「そのうちっていつ？」
「学校に行くようになったらだ」
「じゃ海に行こう」
「海に行く――」
「よし行こう」
「いつ？」
「次の次の休みだ」
「次はどうして駄目？」
「釣に行くからさ。さあ帰れ。ここまでだぞ」
「もっと行く」
「駄目だ。帰れ」

広い舗装された道路に出た。車はまだ走っていなかった。
「遠くに行くなよ」
「うん」
子供たちは次の遊びに、来た道を帰った。私は制帽をかぶりなおし、刑務所で行き止まりになっている広い道を歩いた。アスファルトの道は、靴や車輪の跡がいくつも付いていたが、今はまだ固まっていた。
風が終って、海から少しずつ風が吹いてきた。道路脇の作りかけの官舎に、数人の大工がタバコを吸って立ち話をしていた。近くまで行くと、大工たちは黙り、通り過ぎるまで私を見ていた。
道路が終り、高い塀と太い門柱が行く手をさえぎる。レンガの門柱のひとつは、中を丸くえぐってあり、門衛室になっていた。
所内の木立から蟬の声が聞えてきた。赤く錆びた鉄の大扉は閉じたままだった。堀の水は汚なく、流れの止まった水面には青光りする油が浮いて、絶えず、底からガスが浮き上がっていた。
「お早よう」
私は、取りはずしのできる小さな鉄板の橋を渡り、門衛に声をかけた。

「今日も暑そうですね」

太った門衛は大儀そうに言った。

私は門衛にくぐり戸を開けて貰い、中に入った。ここからは別の世界だった。中には、あぶら蟬の騒いでいる杉が、林のようにたくさんあった。しかし林と違って、下に藪などはなく、木立の幹はスッと地面まで見ることができた。私はそこを抜けて、レンガを埋めこんだ古い道を歩いた。人の声はなく、知った看守にも出合わない。やがて道はなだらかな坂になり、下りると、高いコンクリートの塀は杉の木立に隠れた。そしてグラウンドに出た。グラウンドは広く、手入れの届いた芝生が、緑に輝いていた。周囲を高い急斜面の土手がとりまいて、ここから見えるものと言えば、芝生と空だけだった。

私は、いつものように、近道するため、芝生を踏んで、一番外れの建物に向って歩いた。グラウンドの中程まで来たとき、土手をえぐったトンネルから、一般の囚人がぞろぞろ出て来た。五十人位いる。どの囚人の頭も、今、刈られたばかりで白く光っていた。全員、ランニングシャツに白っぽいズボンを膝までまくりあげ、脇にしずくの垂れる洗濯物を抱えていた。

看守のホイッスルが短く鳴った。囚人たちはその合図で、蟻のように一斉に散らばり、自分

の洗濯物を芝生の上に広げはじめた。風は土手の上を通過するので、洗濯物が吹き飛ばされることはなかった。芝生の四分の一くらいが洗濯物で白く埋められた。囚人たちはその作業を終えると、元通りきちっと列を組み、次のホイッスルで、来た道を畑の手入れに帰って行った。

グラウンドを横切ると、背中が汗ばみ顔からも汗が吹き出た。石段を上って、バラ線で二重に囲んだ、死刑囚専用のレンガ造りの建物まできた。そこには木や芝生など、余計な植物は何も無い。かわりに白い砂が、建物の周囲にびっしりまかれ、その上を朝夕交替で看守たちがほうきでもって掃いていた。その他は詰所が一つと、錆止めの茶色いペンキを塗った鉄骨で組んだ監視塔が一つあるだけだ。監視塔には誰もおらず、かわりに雨よけの付いた探照燈と、ラッパ型のスピーカーが四方を見ている。

詰所には、見なれぬ若い看守がいた。詰所は狭く、屋根はあっても白い砂の照り返しでひどく暑そうだった。私が行くと、その若い看守は帽子の間にはさんでいたハンカチを後に隠し、敬礼して言った。

「お早ようございます」

「暑いな」



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook